

聖書：ヨハネの黙示録 8：1～5

説教題：半時間ほどの静けさ

日時：2021年3月7日（朝拝）

今日はいよいよ第7の封印が解かれる場面です。7つの封印の最後の封印です。前々回6章12～17節で第6の封印が解かれる場面を見ました。それは最後のさばきの日の光景を描いているものでした。そこにはこの世界の崩壊と人々の狼狽また恐怖が記されていました。そして第7の封印が解かれる前に7章の話が挿入され、神の民に与えられる守りと祝福が記されました。そうしてついに第7の封印の場面に到達します。私たちはここに何を期待するのでしょうか。ここには世界最後の日の様子が記されるはずですが、輝かしいキリストの再臨について、また新しい天と新しい地に関することが記されるのでは？と期待するところかと思えます。ところが8章1節は私たちの期待と大きく異なっています。8章1節：「子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。」一体これは何でしょうか。ある人は第7の封印を開いたところ、そこにあったのは空白であった。そしてそこから始まる7つのラッパの話が入るといっている形になっていると考えます。確かに7つの封印に続いて、これから新しいシリーズ、7つのラッパの話が始まります。しかしそのように見るのは正しくないと思われれます。

静けさあるいは沈黙には旧約聖書に照らして積極的な意味があります。ゼカリヤ書2章13節にこうあります。「すべての肉なる者よ、主の前で静まれ。主が聖なる御住まいから立ち上がられるからだ。」主の現れを前にして、すべての被造物が静まるべきことが言われています。これに照らして考えると、8章1節は主の再臨の日を描いていることが見えて来ます。第6の封印が解かれて世界には最終的な崩壊が生じ、人々は恐怖と絶望の叫び声をあげましたが、第7の封印が解かれてそこに生じたのは静けさであった。すべての者は畏怖のあまり、一言も話す言葉を持たず、沈黙が生じた。クラシックのコンサートでは演奏後、盛大な拍手が沸き起こり、ブラボーといった声が飛び交います。しかし時々聞く話は、あまりの演奏の素晴らしさのため、演奏が終わっても直ちに拍手できないという時もある。シーンと静まり返った不思議な時間が現れる。もちろんその後でより大きな拍手が続くのでしょうけれども。そうであるならキリストの再臨の日はなおさらです。4章で絶え間なく賛美しているとされた天使たちの賛美もピタッと止まる。

しかしこれは良い意味においてばかりではないでしょう。旧約聖書に「主の現れ」と「静けさ」が関連する聖句として他にハバクク書 2 章 20 節、ゼパニヤ書 1 章 7 節などがありますが、いずれもさばきと関連します。さばき主の現れを前にして息もできない状態になる。ここにその時間は「半時間ほど」と記されています。この意味をうまく説明できる人はあまりいなくて、ここをコメントしない注解書も多くあります。そんな中、ある人はこの半時間ほど、つまり約 30 分という時間は比較的短い時間だが、色々なことを次々に見させられているドラマの中で非常なインパクトある中断の時だっただろうと述べています。あらゆるものの活動も声も止まり、約 30 分間沈黙が続いた。嵐の前の静けさと言うべきでしょうか。

ある人はここを読んで、キリストの再臨を描く最後の場面にしては説明が少な過ぎる。これだけでは良く分からない。物足りないと思うかもしれません。しかしこのあとまだまだこの日について主が示そうとしていることがあります。ですからこの段階ではまずここまでということなのでしょう。まずは「半時間ほどの静けさがあった」ということを述べるにとどめておく。そして後でまた詳しく記されるのです。その先にあるものを待ち望ませる効果もここにはあると思われま

続く 2 節には 7 人の御使いたちによる 7 つのラッパのことが記され始めています。7 つのラッパに関する話はこの後、11 章の最後まで続きます。果たしてこの 7 つのラッパの話は、これまでの 7 つの封印の話とどういう関係にあるのでしょうか。ある人は 7 つの封印と 7 つのラッパの話は時間的に連続していると考えます。しかしそうでないことは、この後の部分に少し目をやるだけではっきりします。6 章最後の第 6 の封印が解かれる場面では太陽、月、星の全面的な崩壊の様子が記されました。ところが 8 章 12 節を見ると、——そこは第 4 のラッパが吹かれる場面ですが——、そこでは太陽、月、星の 1/3 が打たれ、1/3 だけ暗くなったと記されています。とするとこの第 4 のラッパの話は第 6 の封印の話の後に来るはずがありません。全面的に崩壊した後で、1/3 だけ暗くなったというのはナンセンスです。ですから第 4 のラッパの話は第 6 の封印の話より前の出来事であるということになります。結論から先に言えば、7 つの封印と 7 つのラッパは並行関係にあります。いずれもイエス様の復活・昇天から再臨の日までのことです。それを違った視点から新たな側面を浮き彫りにするものとして語り直されています。そうして多面的な描写

がなされているというのがこのヨハネの黙示録です。興味深いのは7つの封印シリーズでは最初の4つが一セットになっていて、その後、第5、第6の封印の話が記され、第7の封印の話の前に挿入部分がありました。前回見た7章です。そして最後の第7の封印は主の再臨に関するものでした。これはこのあと見る7つのラッパの話と同じです。最初の4つのラッパは1セットで、その後、第5、第6と続き、第7のラッパの話の前に挿入部分があります。そして最後の第7は主の再臨とさばきを直接的に描いています。またその後の15～16章にはさらに別のシリーズ、7つの神の憤りの鉢というシリーズも登場します。ですから前回も触れましたようにヨハネの黙示録は時間的・歴史的順序で書かれていると思って読むと混乱します。黙示録の後ろの方に書いてあることは前の方に書いてあることよりも時間的に後に来るということは意味しません。もし時間的順序で書かれているとすると最後の日までは非常に複雑で細かいプロセスを何回も何回も通って行くことになります。しかしそうではないのです。このヨハネの黙示録は主の復活から再臨の日までの期間を色々なアングルから繰り返し記したものです。その繰り返しを通して内容はより深く、また細部は新しく示されて行きます。そういう意味で8章1節の主の再臨の日に関する記述は短くて良いのです。まだこれは第1回目だからです。これから後で、この日のことは繰り返し語られ、より詳しく示されて行くのです。

さて続く3～5節には金の香炉を持った御使いが祭壇に立ったこと、その彼にたくさんの香が与えられたこと、そしてすべての聖徒たちの祈りに添えてささげられたこと、その香の煙は神の御前に立ち上ったことが書かれています。同じような場面はすでに5章と6章で見ました。まず5章8節では天神的存在が「香に満ちた金の鉢」を持っていたと記されていました。その香は聖徒たちの祈りであったとありました。信者たちの祈りは尊いものとして金の鉢に収められ、かぐわしい香りとなって天使たちによって神の御前に持ち出されているということが言われていました。また6章9～11節には殉教者たちの祈りが記されていました。これは文字通り殉教した人ばかりでなく、主に忠実に歩む全ての聖徒たちを代表する人たちであろうということも前に述べました。彼らは6章10節でこう祈っていました。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

このような彼らの祈りが神の御前に立ち上った様子をヨハネは見ました。そして

何が起こったのでしょうか。8章5節に激しいことが書いてあります。「それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声のとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。」これは何を指しているのでしょうか。これも結論から先に言うと最後のさばきを描いているものと思われます。5節の最後の言葉、「雷鳴と声のとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった」は、この後も主の再臨とセットのさばきを描写する際に繰り返し出て来ます。まず7つのラッパシリーズの第7の場面である11章19節：「すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。」またその後の7つの鉢シリーズの第7番目、やはり主の再臨とさばきを記す場面に当たる16章18節：「そして稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、大きな地震が起こった。」この並行関係を考慮する時、8章3～5節もキリストの再臨とセットのさばきを描写する場面だと分かって来ます。とすると、今日の箇所は話としてどんな流れになっていると言うべきでしょうか。

まず8章1節でキリストの再臨の場面を少し見せられました。「半時間ほどの静けさがあった」とわずかな言葉ですが、大事な意味を持つ言葉が書かれました。そして次の2節では7つのラッパの話が始まりました。新たなシリーズの始まりです。ところがそれが始まったかと思ったら、3～5節に再び最後のさばきの日の出来事が記されました。そしてこの後、6節以降から7つのラッパの話に本格的に入って行きます。このことを理解する時、私たちは次のように思うのではないのでしょうか。それだったら8章1節に続いてまず3～5節を書き記して、それで一区切りとした方が良かったのではないか。そして7つのラッパに関する2節の言葉は1節と3節の間に入れなくて、6節以降と一緒にするように記す方が良かったのではないか。なぜこんな入り組んだ書き方をしたのだろうか。ここはある意味で難しいところだと思います。これについてある注解者はこう言っています。このような方法によってこの幻を見せたイエス様は、7つの封印の話と7つのラッパの話を連結させているのだと。同じやり方はこの後、15章2～4節にも見られます。そしてここではこのやり方によって2つのメッセージが示されていると言います。一つは主の再臨の日には半時間ほどの静けさがあつたばかりでなく、激しいさばきが地に臨んだことが8章3～5節で述べられ、特にそれが聖徒たちの祈りと関係していることが示されていると。6章9～11節で聖徒たちは「いつまでですか」と叫び声をあげていました。一見、彼らの祈りは聞かれていないかのように見えた。その言葉は空しく空中に消えた

かのようなものでした。しかしそうではない。彼らの祈りは覚えられています！その祈りが神の前に立ち上って、最後のさばきがなされるということが8章3～5節に示されています。彼らの祈りはこのように神に覚えられ、豊かに用いられるということです。

そしてもう一つのこととして、主は7つのラッパの幻をヨハネに見せ始めた直後に8章3～5節の幻を見させました。この意図は何でしょうか。この後、7つのラッパの幻においては特に神を信じず、神に反逆するこの世の人々へのさばきが記されて行きます。そのさばきは聖徒たちの祈りを聞いている神のみわざとしてなされるということ、8章3～5節がこの位置に置かれることによって暗示されているのではないかとことです。確かに8章3～5節は直接的には最後のさばきの日について語っているところです。しかし主が祈りを聞かれるのは最後の日だけではない。究極的に神がさばきを実行するのは最後の日ですが、その日までの間も、主は聖徒たちの祈りに聞いておられる。その祈りを聞いておられる神の応答として、このあと見る7つのラッパの出来事も行われる。そのような意味がここにあるのではないかとことです。

いずれにせよ、ここで強調されていることは私たちの祈りの重要性です。6章9～11節の祈りは、前にも述べましたように、ただ私たちを苦しめた者たちをさばいてくださいという個人的復讐を求める祈りではありません。むしろそれは第一に神の栄光を求める祈りです。このままでは神の御名がそしられています。悪を行う者たちは「神はどうせ見ていない。罰など下さない。いや神などいない」と言って、自分のしたい悪を行って生きています。そんな中、聖徒たちは「いつまでですか、主よ！」と叫んでいます。それは言い換えれば神の名誉が回復され、神こそが尊ばれ、誉め讃えられますように！という祈りです。それは主の祈りの第一の祈り、「御名があがめられますように」と同じです。またそれは「御国が来ますように」という第2の祈りとも同じですし、「みこころが天で行われているように、地でも行われますように」という第3の祈りとも同じです。

果たして私たちは自分の祈りの生活を振り返ってどうでしょうか。香と一緒に天使によって神の前に携えられ、立ち上る祈りをささげているのでしょうか。私たちにとっての誘惑は祈りをあまり意味がないものと考えてしまうことだと思います。す

ぐに目に見えて効果が現れるわけではない。そのため、祈りよりも自分が何かすることの方に重きを置いて、結局、自分の力に頼って生活する。様々な戦いや課題に関しても、祈るよりは自分の知恵、自分の計画、自分が何かすることに頼っている。そうして一番大切な力を実は失ってしまっている。しかし祈りは私たちに与えられている霊的な武器です。ここでも祈りが特に取り上げられ、神のみわざのために大きく用いられています。御使いたちを通して神の前に持ち出され、かぐわしい香りとなって立ち上り、神に覚えられています。このことを私たちは心に留めて改めて日々祈る歩みへと励まされたいと思います。私たちは何を祈っても良いのですが、主の祈りから教えられているように、まず優先して祈るべきは神の栄光を求める祈りです。「御名が聖とされますように！」「御国が来ますように！」「御心が天と同じく地でも行われますように！」。悪の力が幅を利かせているこの世のただ中で、罪とサタンの王国が滅ぼされますように。それに代わって福音が全世界の上に力強く広がり、主を信じる人々が起こされ、御国が広がりますように。また信仰をすでに頂いている信者たちもその信仰が強められ、また私自身の生活が益々主と主の御心に従うものとなりますように。そうして主が完成の日、救いの日を早くに来たらせてくださいますように！と。黙示録の最後にある祈りも同じです。「アーメン、主イエスよ、来てください」(22章20節)。こうした神の栄光をまず求める祈りの下で私たちに関する祈りは祈られるべきです。このような私たちの祈りは決して空しくありません。それは天使たちによって神の御前に運ばれ、良き香りとなって立ち上り、神の栄光とそこにご計画遂行のために豊かに用いられ、報われるものなのです。